用

ムックルをやってみよう ... 独特のひびきに心をゆだねる

ムックルは、アイヌ民族の伝統的な楽器の一つです。 世界各地にある「口琴」の一つで、口もとで音を鳴ら して口の中でひびきを大きくし(共鳴させ)、口の形 や息などによって曲をかなでるものです。

今よく目にするものは竹でできていますが、チシマ ザサやノリウツギ (アイヌ語でラスパニ)などで作ら れることもあったようです。

ムックルを手にしたら、まずは口に当てないで、音を出せるようになりましょう。コツは、少しななめ向こうに糸を引くことと、引っぱったらすぐ糸をゆるめることです。なれないうちは、けっこう力がいります。

「ビョーン・ビョーン・ビョーン…」と小さいながらも、音がひびくようになったら、動かさない方の手をほおに固定して、口を半開きにします。さっきつかんだコツのとおりに糸を引くと、ひびきが大きくなるのがわかります。

あとは、口を大きくしたり小さくしたり、あるいは 息をふきかけることで、音程や音色を変えることがで きます。あまりうまくできなくても、自分で鳴らすム ックルの音色は体と心の中にひびきます。



ムックルの気が奏をする東京は水水板 (かまいはらまた) がりから ない 大き できまれる (かまいはからまた) の川上けさ子さん。右後ろはまびいらいになんきなんかん きょうちだが (げいいん 帯広百年記念館(5)の内田学芸員。(『イオル体験ツアー』より)





(左)「イオル体験ツアー」で川上さんの指導を受け、ムックルを練習する
かおしほうちょう とうせんぶん
(上士幌町・東泉園)。(右)ムックル (幕別町蝦夷文化考古館 p150)。

アイヌ文化の手工芸 … 自然と交易から産み出される服や道具

服や道具をつくる手工芸の技術も、親から子へと伝えられながら、地域ごとに特ちょうある文化を発展させました。材料には、草や木など身近な自然のものと、交易で手に入る、本州や大陸のものがありました。

布は、本州からきた木綿の布を使うほかに、木の皮の せんいやイラクサなどの草のせんいから織られました。

オヒョウ(アソピウ)という木の内皮からとったせんいで作った服は「アットゥシ」といいます(p141)。木の皮をむき、内側のやわらかい皮を水や温泉につけてふやかし、大変な手間をかけてせんいを取り出しました。 衣服には、ししゅうでもよう(文様)が入れられ、アイヌ文化のシンボル的な存在となっています。

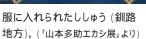
布やししゅうをぬうための針は、交易によって手に入れるもので、大変貴重でした。女性は細工した「針入れ」に入れ、大切にあつかったといいます。幕末の探検家、***ごうらたけしょう 松浦武四郎 (p142)は、世話になるアイヌの人たちへのみやげとして針をわたして、大変喜ばれました。

また、「チタルペ」といわれる文様入りのゴザは、家の壁や祭だん(ヌサ: p134)をかざりました。チタルペは、沼などの水辺に生えるガマ(シキナ)という草に、オヒョウやシナノキ(クペルケッニ)といった木の内皮を染色したテープ状のものを織りこんで作られました。

こうした、ぬう・縞む・織るといったことは、女性の 仕事でした。

男性の手工芸は、彫刻や木工です。狩りのための道具 や小刀、タバコ入れなどが、さまざまなデザインで作り 出されました。







細工された小さな刀(マキリ)。 (上士幌町・東泉園)

⁴ ムックル: 本格的な演奏は、帯広カムイトウウポポ保存会など、各地で伝承活動をおこなっている人たちの演奏や、安東ウメ子さんのCD(幕別町教育委員会)などで聴くことができる。

⁵ 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘 2 番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館

⁶ 幕末(ばくまつ): 江戸幕府(えどばくふ)末期の略で、江戸時代終わりころのこと。